

「(プログラム名称を記入) 参加報告書」

京都大学文学部・研究科1年 八鍬加容子

概要

2017年8月15日～19日、韓国・ソウルにおいて、東アジアジュニアワークショップが行われた。ソウル大学、台湾大学、京都大学が一堂に会し、ソウル市内のフィールド・トリップをし、後半はそれぞれの研究テーマについてプレゼンを行った。

フィールド・トリップで訪れたのは、デリムにある中国系韓国人コミュニティ、大学入試や公務員試験の準備をしている受験生たちの「村」である考試村、セウォル号事件やパク・クネ元大統領退陣の際など、時代を超えて市民デモ・抗議の舞台となってきた光化門や、少女像などである。

そのような社会的・政治的意味合いの強い場所とともに、景福宮や仁寺洞などの観光スポットも、フィールド・トリップの一部であった。

プレゼンにおいては、「社会ネットワークと政治」「社会統合」「ジェンダーと家族」「健康と文化」「労働と産業」「若者」の6テーマで、22人が研究成果を披露。関連したテーマの者同士が集まって、プレゼン後も議論を深めていく様子が、至る所で見られた。

感想

初日のソウルは、あいにくの雨模様。3カ国の社会学を志す仲間たちと、どのような1週間を過ごすのかと、不安と期待の入り混じる幕開けとなったが、ほどなくして不安の方は杞憂であることがわかった。

フィールド・トリップで、特に印象に残っているのは、光化門と若者ユニオンである。光化門は、前述の通り、時代を超えて市民デモ・抗議の舞台となってきた。2014年4月16日に起きたセウォル号事件から3年。だが、今でも事件を風化させまいと写真パネルなどが展示されており、署名活動も続いている。その署名に名を連ねたことで、この場所の意味も、自分の中でさらに深まった。

若者ユニオンでは、15-39歳の若者たちの労働環境を少しでも良くしていこうとする活動の一端を知ることができ、励まされる思いがした。特にソウル市と協同して、失業中の若者に対して、半年間月約5万円を支給し、彼らの生活をサポートするなど、実際に事が動いている様子を聞いたのは有意義だった。

最終日のお別れ会にて、多くの参加者が、韓国・台湾・日本の抱える社会問題の類似性を指摘したとともに、「だからこそ、ともに考えて、行動していこう」と語った。2017年の東アジアワークショップ自体は5日間で終わるが、ここで築いた関係は今後も続いていく。自分が今後追求していきたい、「ホームレス問題」「公共圏/市民活動」という分野においても、多くの示唆を得て、充実した5日間に心から感謝しつつ帰途についた。

今後の研究においても、韓国、台湾の研究者たちとの共同研究の可能性も大いに感じており、終わりではなくこれからが始まりであると感じている。